

教職課程履修学生の教職志望意識の変化に関する分析

Analysis of Changes in Teacher Training Students' Desire to become Teachers

小寄 麻由

Mayu OZAKI

(要旨)

全国的に教員採用選考試験の倍率は低下しており、教員不足は深刻な状態である。文部科学省は教員の人材確保のため、現職教員の働き方改革を進めるとともに、教員採用選考試験の工夫改善を各都道府県教育委員会に求めている。このように教職をめぐる動向が激しい現在、大学に入学して教職課程を履修する学生は、どのような思いで教職課程を履修し続け、教職を志望し教員になっていくのだろうか。逆に教職課程を履修し教員免許を取得しても、教員という職業に就かないという選択をする学生も多い。彼等はなぜ、どのタイミングで教員ではなく一般企業への就職を選択したのだろうか。本稿では2023年度に卒業した学生を対象に実施したアンケートを基に考察し、今後の本学教職履修学生への支援につなげたい。

キーワード：教職、教職課程、内的な捉え、他者との関わり、職業選択

1. はじめに

文部科学省は、都道府県・指定都市教育委員会が実施した公立学校教員採用選考試験（以下教員採用試験）の実施状況について毎年度調査を実施している¹。2024年11月現在で最新の情報として公開されているのは、2022年年度に実施された2023年度採用の教員採用試験の調査であるが、この結果をみると採用者総数は35,981人で、前年度と比較して1,666人増加しているのに対して、受験者総数は121,132人であり、前年度に比較して5,258人減少している。全校種教科の競争率（採用倍率）は、前年度の3.7倍から減少し3.4倍で過去最低である。教員の採用は自治体ごとに行っており、それぞれの自治体によって採用倍率は変動するが、全体として教員希望者が減っていることが分かる。

また教員採用試験に合格しても辞退する人数が非常に多く、例えば2024年11月の高知県教育委員会の発表によると、高知県の小学校教員採用試験においては、合格した280人のおよそ7割にあたる204人が辞退したという²。このような状況は今年に限ったことではなく、また高知県に限ったことでもない。熊本県のように2024年度実施の採用試験を年度内にもう一度実施する、再募集を行う自治体も出てきた³。教職志望者の減少は深刻である。

このような状況を受け文部科学省は、中央教育審議会「質の高い教師の確保特別部会」において、教師を取り巻く環境整備に関する総合的な方策について議論を行い、学校における「働き方改革」の更なる加速化や処遇改善、学校の指導・運営体制の充実等も含めた教職の魅力向上、教職志願者の増加に向けた施策に取り組んでいる⁴。また、意欲ある教員志願者を確保するため、教員採用試験の早期化・複数回実施等の改善の方向性について提示し、教員採用試験の改善を促進する、としている。さらに3年生を対象とした選考試験の実施を促すなどして、教職への入職者や入職希望者を増やし、人材を確保したい考えである。

教師不足が深刻化し、働く場としてマイナスイメージの報道などもあるなか、本学に入学し教職課程を履修する学生は、教職に対してどれほど志望意識を持って学んでいるのだろうか。教育学部や教員養成を主目的としていない本学各学部に入学者、どのような思いで教職課程を履修し始めるのか。そして本学の教職課程で学ぶ過程で教職を志望する気持ちはどのように変化するのだろうか。最終的に教職を選んだ者とそうでない者は、いつ、または何をもってその選択をしたのだろうか。それを解明できれば、教職課程を持つ大学として本学ではどのように教員養成を行い、学生の意欲を支えればよいか、教壇に立って長く教員として社会に貢献できる人材を育てられるのか、という手がかりになるのではないだろうか。

2. 教職課程履修学生に対するアンケートの実施

2-1 教職課程履修学生に関する先行研究

これまでに教職課程履修学生の志望意識について調査分析し、履修回避の方策について提案されてきた例をみていく。丸岡（2019）は、教職課程を履修している学生に対し、学年別にアンケートを実施し、「教師効力感」「自己効力感」「教師興味度」について相関関係と有意差を調べ、「教師効力感」と「教職興味度」は強い相関があるとしている⁵。ここで丸

岡は「『なぜ自分は教職を目指すのか』『なぜ教員をしたいのか』という自身の考えを深化させ、定着させていくことが、教職の魅力ややりがいを得ることにつながる」とし、そのような「教師効力感」を育む場として、先輩や学生同士の意見交換や議論の場である教職課程履修者の自主サークルの活動がきわめて意義深いとしている。

佐々木(2019)は、英文科の教職履修学生に対して、教職回避の調査を行っている⁶。各学年の教職履修学生に「今どのくらい教職に就きたいと思っているか」を5件法で尋ね、そう思う理由について項目を挙げて問う調査である。ここでは1年から2年にかけてと、3年から4年にかけてそれぞれ教職離れが起こる傾向が示されている。また教職回避は「一般就職が有利」「教員採用試験の準備や受験が大変」「興味関心の変化」が主な要因であるとしている。さらに佐々木は4年次生にインタビューを実施し、彼らのコメントから、学生が多く不安を抱えていること、またその不安が教職課程の授業の中で指導教員の発言や指導で生じている点に注目し、「実践的な授業を増やす」こと「学生にポジティブな声掛けをする」ことなどを提案している。

中野(2021)は、教職課程を履修している3年次生と4年次生に対して、大学入学からそれまでの各学年時に「教師になりたい気持ち」を%で示させ、教職課程学生の教員志望の変動要因を調べた⁷。これによると、教育実習中と実習終了時に教師になりたい気持ちが最も高くなっている。また学生へのインタビュー内容をテキストマイニングで分析し、漠然と教職課程を履修していた学生が、徐々に自分の考えに基づいて学ぶようになること、また教育実習という未知への不安感を同じ志を持つ教職履修学生のコミュニティが支えているということに言及している。

教員としての学びの軌跡を可視化しようと試みたものとしては、須田(2023)らが2022年度の4年次生に行ったインタビュー調査がある⁸。これは、国立の教員養成大学で学ぶ学生に対して行われたもので、量的調査と質的調査の両面から実施された。このうち質的調査は4年次生4名に対して教員がZoomでインタビューを実施するという形式で行っている。一人ひとりの学びのストーリーを聞き取り、教職への思いを%で表現させ、その推移をグラフ化している。これによると、学生の教職に対する気持ちの変化に作用するのは、「自身の経験をプラスに変える個人の内発的な捉え」と、「他者との関わり」の2つの要素であり、そこで重要なのは「関わりあいながら学ぶ」ことだとしている。

2-2 本学における教職履修学生の現状

本学に教育学部や教育学科はないが、薬学部を除く各学部で教員免許を出すカリキュラムを有している。これは「大学における教員養成」と、「開放性教員養成」の原則によるものであり、次世代の教育に直接かかわる教員を育成することは、社会貢献の意味でも非常に重要な役割であると言える⁹。しかしながら開放性教員養成の場合、学生は学部の学びも充実させなければならぬうえ、卒業単位以外に教員免許を取得するための単位も多数取得しなければならず負担が大きい、いわゆるカリキュラム・オーバーロードの問題を抱えている¹⁰。

本学の教職課程を履修する学生の傾向として、1年生で教職課程を履修する学生は全学

で200人を超えるが、学年があがるにつれ減少する。例えば、2023年度の卒業生は、2020年入学時には全学で216名の教職課程履修者がいたものの、2年進級時点で151名、3年進級時点では68名、4年次生では65名と減少していった。さらにこのうち教員を志望し何等かのかたちで教職に就職した学生は、把握しているだけで22名である。これは現役で教員採用試験に合格した者、公立および私立学校の講師として就職した者、教育系大学院に進んだ者を含んだ人数である。このように教員免許取得を目指し、教職課程の単位を積み上げていながら、教員として就職する学生は入学時の10%程度である。

2-3 本学教職課程履修学生に対するアンケートの方法と内容

先行研究で使用された質問紙やインタビュー内容を参考に、「教職選択についてのアンケート」を作成し、2023年度12月時点で教職課程を履修している4年次生の学生を対象に実施した。2023年12月実施の教員免許一括申請ガイダンスでアンケート用紙を配布し、その場で回収するとともに、記入できなかった学生や欠席した学生は後日個人的に提出するよう呼び掛けた。

学生には①教員採用試験に合格した学生、②公立学校講師登録予定または私立学校講師として勤務予定の学生、③本学大学院または他大学大学院進学予定で教員志望の学生、④教員免許を取得予定だが教職以外の進路を予定している学生、のいずれかを選択させた。該当する教職履修者は全員で65名だが、最終的に提出したのは32名で、その内訳は①5名、②7名、③4名、④16名であった。

アンケートの内容は以下の(1)~(4)の通りである。

(1) 「教職ライフイベント」

「教職ライフイベント」というタイトルで表1の例を示し、教職課程で学習してきた自分の気持ちを振り返らせた。「教員に必ずなりたい」という気持ちを100%として、その時々「教職への思い」を%で表示させた。この時空欄を作らず、すべての年齢時について%表示を記入させ、連続する気持ちの変化を表現させた。C「具体的な出来事～」の欄には、教職につながる出来事を具体的に記入させた。特にB「教職への思い」に影響があった出来事については、詳しく書くよう指示したが、すべての時期についてコメントを書く必要はないと伝えた。

(2) 職業選択に影響を与えた人、出来事

進路選択、つまり教職を志望、あるいは教職以外の職業を志望したことに、大きく影響した人もしくは出来事について以下の項目を挙げ複数選択させた。また「その他」として自分で項目を作ることも可とした。さらに選んだ内容について具体的なエピソードがあれば記入させた。

- | | | |
|---------------|--------------------|-----------------------------|
| ①小中高の教員 | ②小中高の友人 | ③小中高の体験 |
| ④大学の教員・職員・指導員 | ⑤大学の友人 | ⑥家族 |
| ⑦教職課程の授業 | ⑧教育実習での体験 | ⑨スクールサポーターの体験 ¹¹ |
| ⑩塾での体験 | ⑪部活動やアルバイト（塾以外）の体験 | |

表1：ライフイベントの記入例

A年齢	B教職への思い (%)	C具体的な出来事、当時の思考や行動、状況の振り返り 特にBに記入した%が大きく変化した理由は必ず書いてください。
中学時代	20	・部活動に熱中した。
高校入学	30	・塾の先生に憧れを持つ。
高校2年4月	0	・目の前のことに必死で教職について考えたことがなかった。
高校3年4月	0	
高校3年11月	0	・神戸学院大学を第1希望にしたが、教職については考えていなかった。
大学入学	50	・教職課程のオリエンテーションで漠然といいなと思った。
大学2年前期	70	・教職の授業、特に「生徒・進路指導論」に興味を持った。
大学2年後期	50	・塾のバイトをしていたが、授業がうまくいなくて悩んだ。教員に向いていないかと思った。
大学3年前期	70	・教職サポート室の先生と話をし、塾と学校との違いについて教えてもらった。
大学3年後期	80	・スクールサポーターで学校現場を見て、やはり教職に就きたいと思うようになった。部活の顧問もしたいと思った。
大学4年前期	90	・教育実習が大変で、一瞬くじけそうになったが、教採面接練習で教職に向き合って考え、気持ちが固まった。
大学4年後期	100	

- ⑫就職活動の体験 ⑬教職教育センターの教員採用試験対策講座への参加体験
⑭その他（その他を選んだ場合は具体的に書く）

(3) 身近に教育関係の職業に就いている、または就いていた人はいるか

身近に小中高大教員、学童保育施設勤務など教育関係の職業に就いている人がいるかどうかを回答させた。その際自分との続柄と職種も記述させた。

(4) 教職課程を履修したことに対する感想や意見

教職課程を履修したことに対して、感想や意見を自由記述させた。

3. 教職課程履修学生に対するアンケートの結果と考察

3-1 教員志望についてカテゴリー別平均値

先に述べたように、今回のアンケートに該当する学生は①教員採用試験に合格した学生、②公立学校講師登録予定または私立講師勤務予定の学生、③本学大学院または他大学大学院進学予定で教員志望の学生、④教員免許を取得予定だが教職以外の進路を予定している学生、のいずれかに該当するが、①～③の学生は教職への就職を選択したとみることができる。したがって①～③の学生16名を教職を選択したA群、④の学生16名を教員以外の職業を選択したB群とする。

教職ライフイベントの表で「教職への思い」の推移を%で表示させたが、これについて全回答者とA群（教員志望学生）、B群（教員以外の就職を選択した学生）のカテゴリーに分け、学生が書いた%数字の平均値をグラフ化した（図1）。なおアンケートでは上限を

100%と設定したが、教職への強い気持ちを表現しなかったのだろう、最大値を120%と記入した学生が2名いた。学生の思いは理解できるが、統計処理上120と記述されていた部分は100と読み替えて処理している。

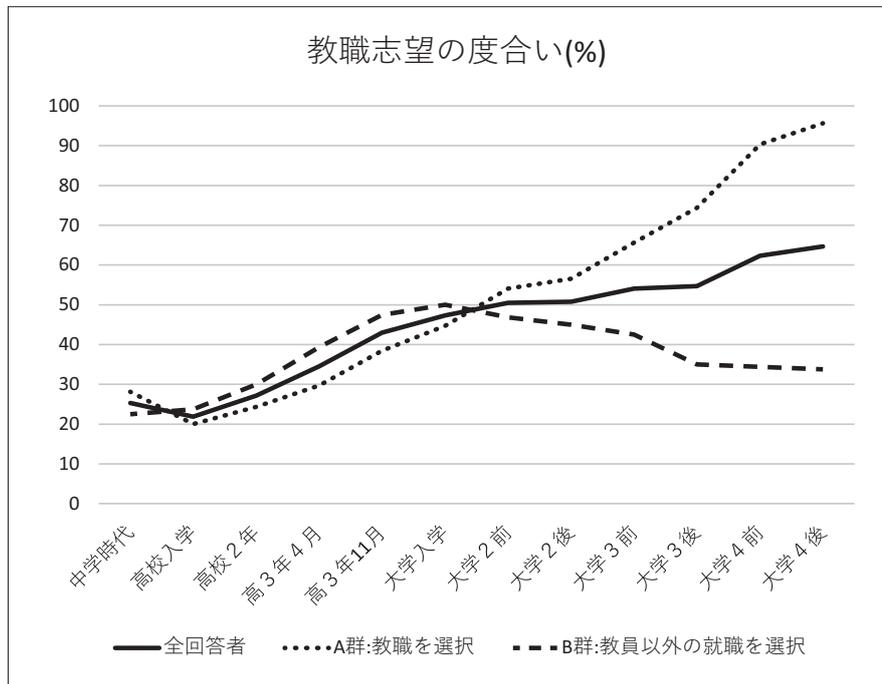


図1：教職への思い カテゴリー別%の平均値

ライフイベントごとの「教職への思い」の全体の傾向を見ると、大学入学まで、特に高校生時代進級する間に少しずつ希望が高まってきている。しかし平均50%を上回ることはないままに入学している。大学入学時や大学1年次生までは、教職を選択したA群よりも、むしろ教員以外の就職をしたB群の方が教職に対してやや高い数値である。注目すべきは大学2年次後期のタイミングで、その後教職志望の度合いが大きく分かれる、いわゆるターニングポイントである。この時点を経てA群は教員志望の気持ちを高めていく。特に大学4年次前期の伸び率が大きい。これは教育実習や教員採用試験を受験する時期と重なる。一方教員以外の職業を選択したB群については3年次生後期で急激に下がる。これは就職活動が本格化する時期にあたる。しかしB群においては、就職が決まった後でも教職への思いが完全に0%になるわけではなく、平均30%を切ることなく卒業していく。つまり教職への思いを残したまま卒業する学生がいることが分かる。

このグラフから、まず大学入学時までの時期と2年次生から3年次生前期ごろの思いの変化に注目する。また教職を選択するに至った要因についてさらに詳しくみていく。

3-2 「教職への思い」 カテゴリー別箱ひげ図

各時期の分布がより詳しく分かるよう、同じデータで、全回答者、A群、B群ごとに箱ひげ図を作成した(図2~4)。

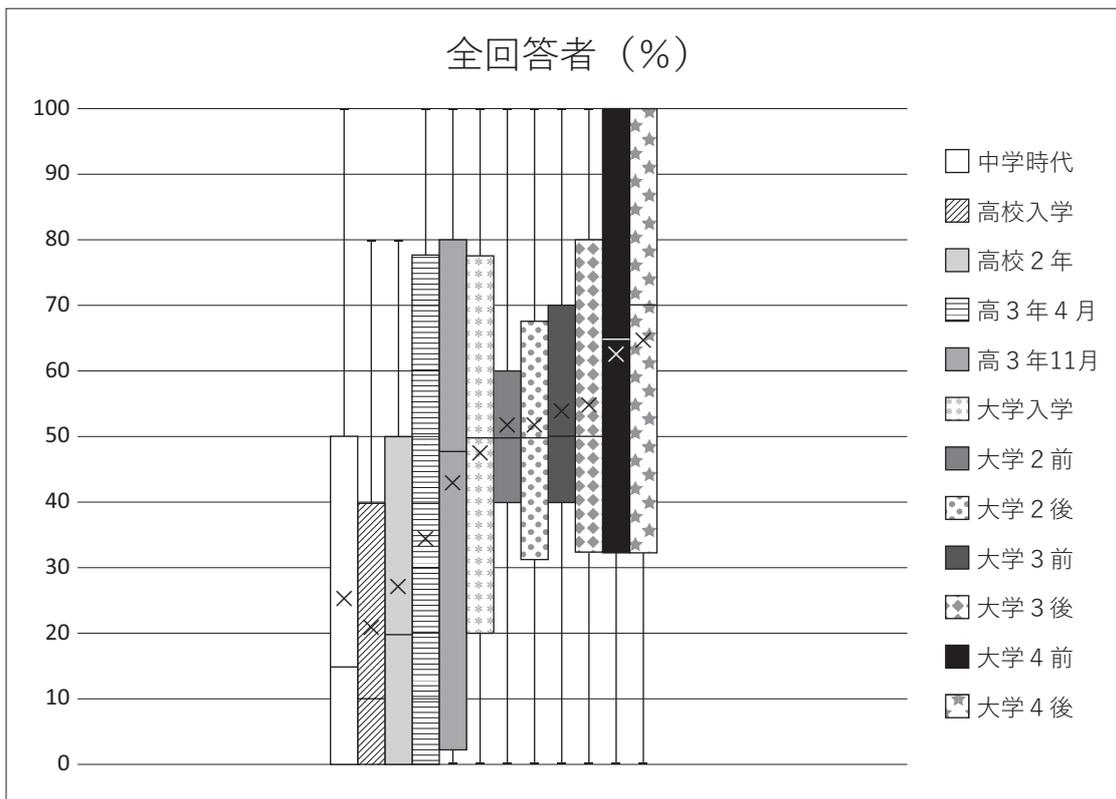


図2：教職への思い 全回答者の箱ひげ図

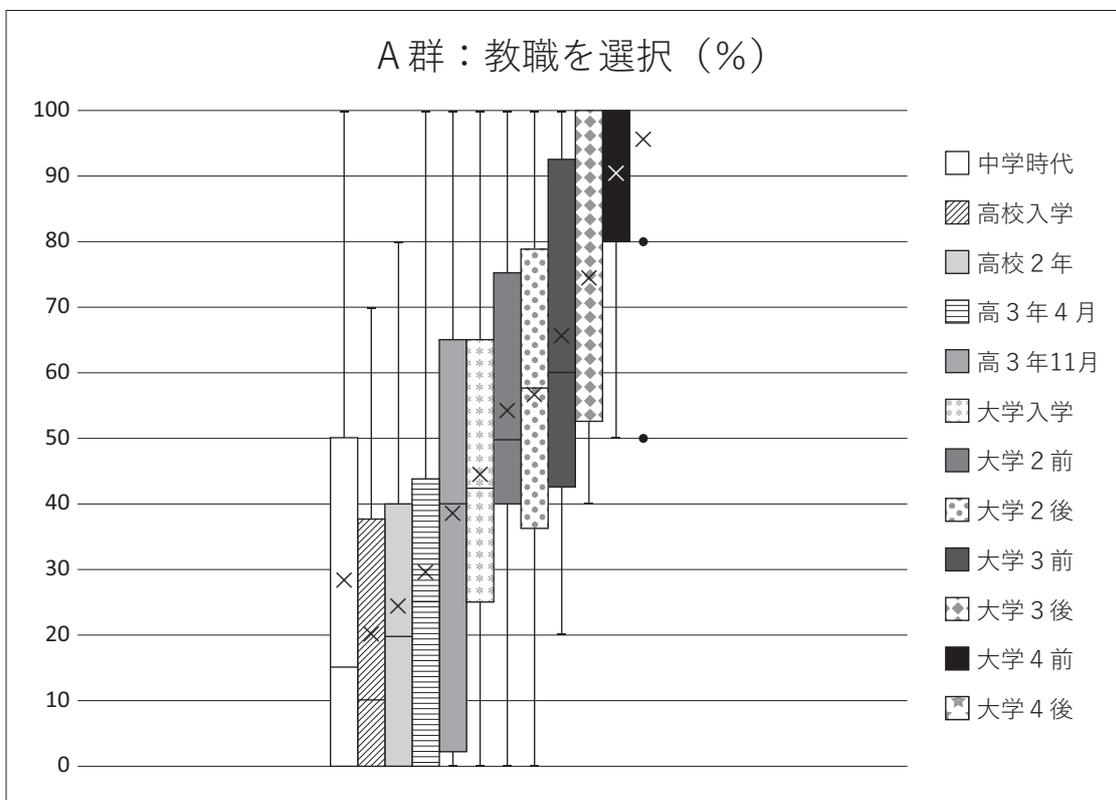


図3：教職への思い A群：教職を選択した学生の箱ひげ図

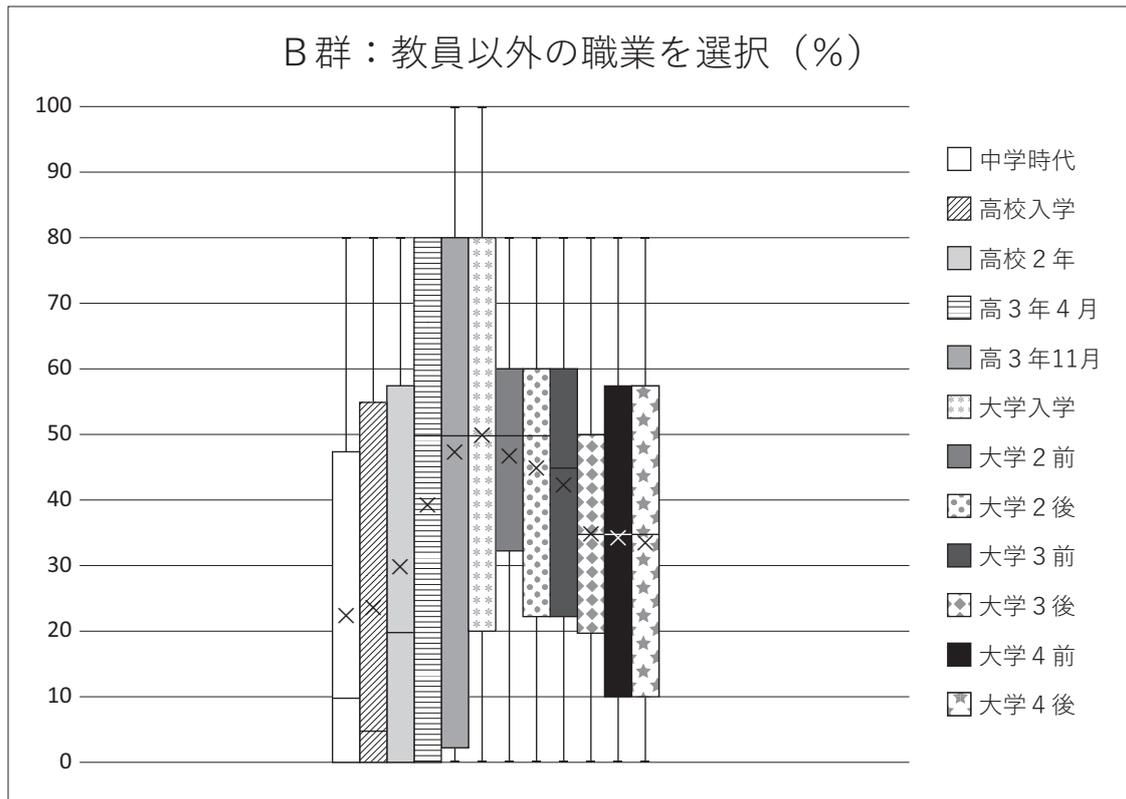


図4：教職への思い B群：教員以外の職業を選択した学生の箱ひげ図

平均値で見た時にも述べたように回答者全員の箱ひげ図からは、大学入学時の意欲は平均50%を超えることはなく、分布も低位に集まっていることがわかる。ただしA群B群とも高校生ですでに100%のモチベーションを持って本学に入学してくる学生も存在している。

教職を選択したA群においては、2年後期までは0%から100%まで回答が分散しているが、大学3年次生進級を越えると、その後平均値は急速に上昇し、分布の幅も狭くなっていく。大学4年前期になると分布は完全に高位に集まっている。

一方教員以外の職業を選択したB群は、高校3年11月、つまり大学進学を決める時期に最も振れ幅が大きく、大学入学時の数値もまだ分散している。しかし大学2年前期に急速に平均値である約47%周辺に収束し、その後数値は低位に集まってくる。ただし教職への思いを80%に保ったまま卒業していく学生もいることが分かる。

4. 自由記述から「教職への思い」の推移を読み取る

4-1 大学入学時に教職課程にどのような思いを持っているか

ライフイベントの記述部分を丁寧に読み、学生の思いを読み取っていく。この時先行研究を参考に「個人の経験の内的な捉え」と「他者との関わり」という視点で分類していく。ただしここで「個人の経験の内的な捉え」（以下「内的な捉え」）は教職に対してポジティブな場合もネガティブな場合も検討することとする。

例えばライフイベントの表の高校3年11月に、大学受験の段階で①「教職課程を取ることができるから受験した」といった内容の記述がある。これも「内的な捉え」であろう。

その数はA群で16名中11名いたのに対し、B群では16名中2名である。また大学入学までの欄に、「教育について学ぶうちに興味を持った」などの①以外の「内的な捉え」を記述したのはA群11名、B群は3名だった。一方③「自身が出会った小中高の教員との関わりで教職を考えるようになった」というような記述をした者はA群で16名中3名、B群で16名中10名、④「親に勧められた」という内容の記述をしたのはA群1名B群2名である。③④は「他者との関わり」からの選択に分類する。ここまでを表にまとめると次のようになる（表2）。

表2：教職課程を取るまでの時期についての記述内容

		記述内容	A群 n = 16	B群 n = 16
内的な捉え	①	教職課程のある大学を選んだという内容	11 (69%)	2 (13%)
	②	①以外の内的な捉え	11 (69%)	3 (18.8%)
他者との関わり	③	小中高の教員との関わりについての内容	3 (18.8%)	10 (63%)
	④	親に勧められたという内容	1 (6%)	2 (13%)

大学入学までの時期、平均値、箱ひげ図とも「教職への思い」の%の数字はA群B群とも低位で、差異がないように見えるが、記述内容をみると、A群とB群では明らかに大学入学前から教職に対する向き合い方が異なっていることがわかった。つまり、のちに教職を選択することになるA群の学生は、すでに教職に対して「内的な捉え」を強く持っている学生が多く、その結果教職課程を持つ大学を自ら選んで受験し、本学に入学している割合が大きいことがわかる。もちろんこれはあくまで傾向で、大学入学まで全く教職に思いがなかったのにもかかわらず、入学当初の教職課程履修登録ガイダンスを聞いて教職課程履修を決め教職を選択するに至ったというA群の学生も1名いる。履修登録ガイダンスという「他者との関わり」、新たな出会いも職業選択に影響を及ぼすことになり得るという例である。

逆にB群は、小中高の先生に憧れたり、進学時に教職を強く勧められたりといった「他者との関わり」を支えに教職課程を取り始める学生が多い。しかし入学当初は「教職への思い」が強いB群だが、「内的な捉え」が弱ければ、最終的に教職を選択しないことがわかる。

4-2 2年次～3年次前期にどのような思いを持っているか

平均値の推移による概観、および箱ひげ図からもわかるように、A群、B群ともターニングポイントは2年次前期から後期である。この時期にどのような気持ちの変化が起こっているのか、またその時期を乗り越えた3年次前期に何が起こっているのか、A群、B群それぞれライフイベントの大学2年次前期から3年次前期までの自由記述を取り出して、すべての記述を以下の4項目に分類し出現率をまとめた。一人の学生が複数記述している場合もあるし、何も記入しない学生もいる。

- ①「内的な捉え」と言える内容で教職に対してポジティブなライフイベント
- ②「他者との関わり」に関する内容で教職に対してポジティブなライフイベント

- ③「内的な捉え」と言える内容で教職に対してネガティブなライフイベント
 ④「他者との関わり」に関する内容で教職に対してネガティブなライフイベント

ここでいう①に該当する記述は、例えば以下のようなものである。

- ・ 苦しいけれど、その中でもやりがいがあった。
- ・ 教職の授業を受けているなかで、教師は難しいがやりがいがありそうだと感じた。

②は大学の講義、勉強会、スクールサポーター、アルバイトなどで教員や友人などに関わるような内容を記述しているものを取り上げた。例えば以下のような記述がある。

- ・ 塾のアルバイトを通して、他人の人生に深くかかわる仕事に興味をもつ。
- ・ 対面授業が始まったことで、教職履修者同士で助け合えた。
- ・ 「生徒・進路指導論」の講義の先生の言葉で絶対的な憧れを持つようになった。

③は以下のような記述を取り上げた。

- ・ 履修の多さに驚き、課題で精一杯。模擬授業もその場しのぎのようになる。
- ・ 授業の組み立て方が大変で少しやる気が落ちる。
- ・ 学んでいるうちに、自分にできるかどうかわからなくなった。

④としては以下のような記述を取り上げた。

- ・ バイト先にそのまま就職しようかと考える。
- ・ 教職の友達が次々と（教職課程を）やめていき、自分もやめようか悩んだ。

表3：大学2年次前期～3年次前期におけるライフイベントの自由記述分析
 A群（教職を選択した学生） n=16

	①内的な捉え ポジティブ	②他者との関わり ポジティブ	③内的な捉え ネガティブ	④他者との関わり ネガティブ
2年次 前期	10 (63%)	2 (12.5%)	2 (12.5%)	0 (0%)
2年次 後期	6 (38%)	2 (12.5%)	5 (31.3%)	2 (12.5%)
3年次 前期	7 (43.8%)	7 (43.8%)	2 (25%)	1 (6%)

表4：大学2年次前期～3年次前期におけるライフイベントの自由記述分析
 B群（教職以外の職業を選択した学生） n=16

	①内的な捉え ポジティブ	②他者との関わり ポジティブ	③内的な捉え ネガティブ	④他者との関わり ネガティブ
2年次 前期	3 (18.8%)	1 (6%)	2 (25%)	0 (0%)
2年次 後期	1 (6%)	0 (0%)	3 (18.8%)	1 (6%)
3年次 前期	1 (6%)	0 (0%)	3 (18.8%)	1 (6%)

このアンケートでは、特に気持ちの変化があった場合にその時期の該当箇所にライフイベントを記述するよう指示を出した。したがって特段何も気持ちが揺れることがなければ記入せずに空欄で提出することも可能であった。B群は全体的を通して記述が少なかった。なおこの学年は2020年に大学に入学しており、大学1年次はコロナ禍で登学できない状態、2年次前期も登学に制限がかかっていた。したがって2年次後期になってようやく対面登学が再開されている。そのことが学生の気持ちに少なからず影響していると思われるが明らかにできていない。

A群の特徴としては、2年後期ネガティブな内容が増えるが、このほとんどが「授業が多い」「単位取得が難しい」という内容である。しかし3年前期は一転してポジティブな内容が増える。ポジティブな「内的な捉え」として具体的には、「単位取得に邁進した」という内容や、「教科教育法で行った模擬授業の面白さ」に言及している記述がある。「他者との関わり」として多いのはスクールサポーターとしての経験であるが、他にも教育実習事前指導における先輩からの話などを挙げる学生もいた。3年次生に進級し単位取得のめどが立ってくること、教職課程の授業で実際の場に近い学びが始まること、またスクールサポーターなど小中学生と直に接する機会を得たり教育現場を経験したりすることなどが、学生の気持ちを後押しするのではないだろうか。

逆にB群は、ポジティブな「内的な捉え」に関する記述も、「他者との関わり」を示す記述も少なくなっていく。

4-3 職業選択に影響を与えた人、出来事

最終段階の進路選択に大きく影響した人もしくは出来事について「その他」の項目を含む14項目から複数回答させたところ、図5のようになった。

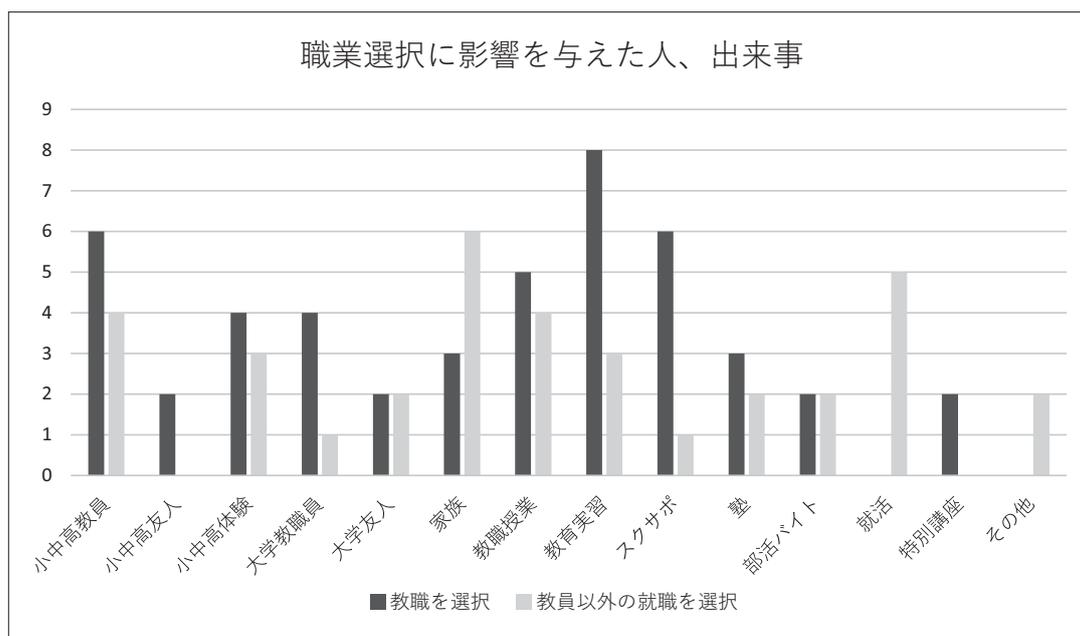


図5 職業選択に影響を与えた人、出来事

教職に就くA群では、教職選択に影響を与えたこととして「教育実習」の項目を選んだ学生が16名中8名と最も多い。次いで「小中高の教員」、「スクールサポーターの体験」が6名の同数、「教職の授業」5名と続く。一方教職以外の職業に就くB群では「家族」が16名中6名最も多く、次いで「就活での体験」の5名であった。「家族」を選んだ学生の記述をみると、「家族に教職免許をとるよう進められた」「安定した職業に就いて欲しいと言われた」「母親が教員だったのでその姿をみて」などの内容がみられる。選択肢に「家族」を入れたのは、教職に入職するかしないか、その選択を決定した要因として「家族」のアドバイスがどれだけあったかを探りたかったのだが、質問の意図がうまく伝わっていない学

生も多く、おそらく「教職課程を選択した時に家族の助言があったか」を問われていると思った学生が多かったようだ。

むしろA群で多かった項目をB群でみると、「教育実習」を選んだのは16名中3名、「小中高の教員」は4名、「スクールサポーターの体験」は1名のみだった。つまり、教職に就くA群と一般企業に就職するB群を比較して考えると、学生が教職に就こうと思うきっかけは、教育実習やスクールサポーターなど実際の学校現場での体験によるところが大きいことがわかる。またA群とB群で差の大きい項目が「小中高の教員」や、「大学教職員」など学びの場での先輩教員との出会いであることも注目すべき点である。ここで思い出したいのは、教職ライフイベントの高校までの記述では小中高の先生がきっかけで教職をとるようになったと記述した学生はA群の3%にすぎなかったということである。ここから教職に就くことを選んだA群の学生は、4年間の本学での学びの間に、小中高の教員に対する思いがポジティブな方向に捉え直されたのかもしれないと推測する。

最後に身近に教育関係の職業の人がいるか、という質問ではA群が16名中10名(63%)、B群は16名中4名(25%)がいると回答した。A群には教育関係の仕事をしている大人が身近にいる学生が多いことがわかる。

4-4 教職課程を履修したことに対する感想や意見の記述からの考察

教職課程を履修したことに対して感想や意見を自由記述で回答させた。A群16名中15名、B群16名中13名が何らかの記述をしたが、記述した学生はA群B群とも全員が、教職課程を最後まで履修し免許を取得できることの充実感や達成感を述べていた。例えば「とにかく苦戦したが履修していてよかった。大学で一番の思い出となった。」という記述もみられた。このアンケートの実施が教職課程の最終段階である教員免許一括申請のガイダンスを行った時であった、ということや、アンケートを実施したのが教職課程担当の教員だったことも影響してであろう。

教職への「内的な捉え」についてみると、A群は全員数か月後に教壇に立つことが決まっているため、意欲に溢れる記述が多いが、B群の中にも「卒業後は教職以外の職種ですが、機会があればいつか教職員も考えています。」「塾講師をしながら教採の受験も考えています。」など教職にポジティブな記述がみられる。具体的には将来教員採用試験を受け直すかもしれないと書いた学生が4名、教育実習の経験を通して教員に気持ちが戻ってきたという内容を記述した学生が2名いた。

「他者との関わり」という視点からみると、A群で1名が、「教職を通じたつながりや人との関わり、教え教えられる仲間が存在、何より何度も負けそうになった時に支えてくれたサポート室指導員の先生をはじめとする先生方のご支援に感謝しかありません。」と記述しており、明らかに「他者との関わり」が自分を支えたと述べる学生がいた。また別の1名が専任教員に対する感謝を述べている。B群では専任教員や教職サポート室指導員に対しての記述はないが、「教職で出会った友人たちは私にとって一生の宝物です。」「よい仲間に出会えたことは本当に感謝したい。」というように仲間や友人との繋がりに言及した学生が2名いた。

5. まとめ

教職課程を履修し卒業間際の本学4年次生を対象に「教職への思い」がどう推移してきたかアンケートを実施し、「内的な捉え」と「他者との関わり」という視点で検討した。

のちに教職を選択することになるA群の学生は、大学入学までの小中高時代、すでに教職に対してポジティブな「内的な捉え」を強く持ち、教職課程のある大学を自ら選んで受験してきた学生が多い。教職にすすむかどうかのターニングポイントは2年次生後期から3年次生であるが、この時期A群B群とも履修すべき授業が多く単位取得が苦しくなり教職課程の履修を断念しそうになる。

しかし3年次前期、A群は一転して教職に対して意欲を高め、ポジティブな内容の記述が増える。この時期から「他者との関わり」がA群の学生の「教職への思い」を後押しするのである。具体的には、スクールサポーターでの児童生徒との関わり、現場の教員との関わり、教育実習事前指導における先輩からの話などで教職への思いが高まったとした学生が多くみられた。そして最終的にA群が教職に就くのは、教育実習やスクールサポーターなど実際の学校現場での体験が決め手となっている。また「小中高の教員」や、「大学教職員」などが教職の選択に影響を与えたと回答した学生もB群より多かった。現在教育に携わっている大人との出会い、先輩教員との出会い、過去の教員像の捉え直しが、学生を教職の道へ誘っている。

一方で、のちに一般企業に就職するなど教職に就かないB群は、大学入学当初、親の助言や教員との出会いなど「他者との関わり」を手掛かりに教職課程を履修した学生が多い。しかし「内的な捉え」は低いままスタートする。さらにターニングポイントである2年次から3年次においては「内的な捉え」だけでなく「他者との関わり」もほとんどなく、教職への思いが下がっていく。ただし教育実習を体験することで、教職への思いが維持され、気持ちを残して就職していく学生が一定数いるということがわかった。

本調査はA群B群ともに16名という限られた人数である。しかも教職課程担当の教員による調査であるため、教職により親和的な気持ちを持つ学生が協力した、とみるべきである。さらに、A群B群とも最終的に教員免許を取得できた学生であることに変わりはなく、この調査には登場しない「教職課程を途中で断念した」多くの学生がいる。今後、そのような学生の声こそ拾っていくアンケートを考えたい。

6. おわりに

今回のアンケートで、教職履修学生の教育課程後半において、教職に向かうためのポジティブな「内的な捉え」を喚起し教職に就こうという気持ちを後押しするのは、「他者との関わり」であることがわかった。「他者との関わり」を促すような仕組み、例えば大学の教職課程の科目でアクティブラーニング型の授業展開を行う、教職自主サークルや勉強会といった場を保障し支援する、など教職履修学生同士で学び合う機会を作る、ということも考えられる。また合格体験談や教育実習について聞く会を実施する、卒業生教員と交流する、地域のスクールサポーターなどの参加を促す、といった先輩教員と出会う機会を持たせることも大いに効果が期待できる。本学でもこのような内容を学生に提供すべく、教職

教育センター教職教育サポート室を設置するなどして教職を履修している学生を支援してきたが、今回のアンケート結果を教職課程に携わる教職員やサポート室指導員と共有し、よりよい学生への支援を考えていきたい。

文部科学省は「令和の日本型学校教育」のなかで「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を求めている¹²。このうち「協働的な学び」とは、年齢や学校を越えての学習、地域とも連携して教育を行うことが謳われている。このことは初等中等教育だけでなく大学教育にも求められるべきことであるし、特にこの「協働的な学び」を教授できる教員を育成すべき教職課程こそ、そのような教育をしていくべきであろう。その意味でも「他者との関わり」を促す教育は推進されるべきである。

教員不足は全国的に喫緊の課題である。次の時代の教育を担う若者を育てる大学の教職課程は、今後何をしていけばよいのか、その責任は重い。本稿でいうB群のような学生が、教育の視点のある他者ともっと早く関わりを持つことができれば、教職の道を選択したかもしれない。「他者との関わり」を促す教職課程のあり様をさらに考えて実施し、教職に少しでも気持ちのある学生が、力強く教職に進めるよう尽力したい。

注

- 1 文部科学省, 2023「令和5年度(令和4年度実施)公立学校教員採用選考試験の実施状況のポイント」
https://www.mext.go.jp/content/20231225-mxt_kyoikujinzai02-000033218_1.pdf
(最終閲覧2024年11月16日)
- 2 NHK 高知 NEWS WEB, 2024「高知県教委 小学校教員採用試験で合格者の7割超が辞退」
<https://www3.nhk.or.jp/lnews/kochi/20241107/8010022024.html>
(最終閲覧2024年11月16日)
- 3 熊本日日新聞, 2024「熊本市の教員追加募集、倍率1.8倍に 臨時採用講師まで対象広げた効果 一部教科は志願者なしも」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/d8ad3cf3235a17573693faa60e57eef1a41d3924>
(最終閲覧2024年11月16日)
- 4 文部科学省, 2024「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について(答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/099/mext_00003.html
(最終閲覧2024年11月16日)
- 5 丸岡俊之, 2019「教職課程学生の教職志望意識の形成に及ぼす影響 ―教師効力感、自己効力感、教職興味の視点から―」近畿大学教育論叢 31(1) pp.53-66
ここで「教師効力感」とは、「教育場面において子どもの学習や発達に望ましい変化をもたらす教育的行為をとることができるという教師の信念」と定義している。
- 6 佐々木顕彦, 2019「教職課程履修者の教職回避に関する調査研究 ―英文科の学生を対象に―」武庫川女子大学 学校教育センター年報 第4号 pp.89-101
- 7 中野達也, 2021「教職課程学生の教員志望の変動要因分析」駒沢女子大学 研究紀要 第28号 pp.125-142
- 8 須田康之, 山中一英, 別惣淳二, 石野秀明, 清水優菜, 2023「学生は教師になることとどのように向き合っているのか ―インタビュー調査に基づく学びの軌跡の可視化―」大学教育学会誌 45(2) pp.81-91
- 9 2006年の文部科学省の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」に以下の説明がある。「我が国の教員養成は、戦前、師範学校や高等師範学校等の学校で行うことを基本としていたが、戦後、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を兼ね備えた多様な人材を広く教育界に求めることを目的として、教員養成の教育は大学で行うこととした(「大学における教員養成」の原則)。また、国立・公

立・私立のいずれの大学でも、教員免許状取得に必要な所要の単位に係る科目を開設し、学生に履修させることにより、制度上等しく教員養成に携わることができることとした（「開放制教員養成」の原則）。」

- 10 阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会では、2024年5月の課題研究会において「『カリキュラム・オーバーロード』の問題から、これからの教職課程を考える」と題して研究会を行い代表校が現状を報告した。開放性教員養成を行っている阪神地区68大学を会員に有するこの協議会において「カリキュラム・オーバーロード」は問題視されている。
- 11 スクールサポーターとは本学のある神戸市の取り組みで、教員を目指す大学生・大学院生・短期大学生を、神戸市立の小・中・義務教育学校に配置し、学校教育活動を支援するとともに、将来教員となる人材の自覚や資質を高め、神戸の教育力向上に資することを目的に実施されている。
- 12 文部科学省，2021「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ー全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学び、と協働的な学びの実現（答申）」

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf

（最終閲覧2024年11月16日）

